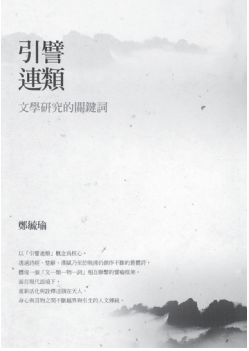
方法としての〈六朝〉
——鄭毓瑜『姿と言』『引譬連類』を評す



林　少陽

鄭毓瑜の『姿と言』（中国語原題：『姿與言——詩国革命新論』台北：麦田出版、二〇一七年）について語る前に、氏の前著『引譬連類——文学研究のキーワード』（原題：『引譬連類——文学研究的関鍵詞』台北：聯経出版、二〇一二年）について言及しなければならない（以下、両著の参照頁を示すときは『引』と『姿』と略す）。紙幅の制限もあり、『姿と言』も『引譬連類』も十分論じ得ないことになるが、ここで両著を関連付けながら評者なりに紹介したい。特に『引譬連類』は単独で論じる必要性がある理論的な力作なので、ここでは略論するに止めたい。

1

『引譬連類』は長い「導論」と、六つの章から成っている。第六章の「旧詩語と新世界」では、初代駐日公使の書記官として来日した黄遵憲（一八四八－一九〇五）が戊戌変法前後に提唱した「詩界革命」という、古典文言定型詩（日本でいう漢詩）の改革を試みる近代詩の主張と

実践を扱っている。第六章以外の他の章は、みな東西の理論を駆使しながら中国古典文学における概念を論じている。古典詩学の著書であるが、狭い意味での文学を遥かに超えているような著書である。

「引譬連類」という用語は、前漢の学者孔安国が『論語』の「興」という概念を解釈する際に使った言葉である。初唐の孔穎達（五七四－六四八）は孔安国の解釈を受けて、これを「興者、起也、取譬引類、起発己心、詩文以見草木鳥獸以見意者、皆興辞也」と再解釈した。[1] 更に宋の学者の邢昺（九三二－一〇一〇）は「詩可以興者也。詩可以令人能引譬連類、以為比興也」と解釈した。[2] 著者の鄭氏はこの「引譬連類」の解釈の系譜を理論的に発展させようと試みている。すなわち「引譬連類」とは二つの孤立した物事の比較ではなく、むしろそれは主体が二つの組となるような比喩の類を結ぶ言語的営みとして解釈しているのである（『引』一八頁）。「連類」（聯類）は英訳では correlative thinking であるが、この「連類」こそ鄭氏の前述二著、特に『引譬連類』の理論の最も核心的概念である。

著者はその『引譬連類』で、「文」・「明」という中国文学・思想の固有の概念をもって「譬類」的世界が構築される根源的構造を提示しようとしている（『引』二四頁）。そして上古文学・思想における「心／身」「言（文）／物」とが、類を跨いで連結する仕組みを明らかにしようと試みている（同前）。「連類」とは、鄭氏が引用しているアメリカの中国文学者 Stephen Owen（宇文所安）の英訳によれば、categorical association となっており、[3]「類」は category, categorical analogy となっている。[4] この観点からすると、詩的言語とは、一つの類と別の類の「物」を関連・連動させることを通して、または「類を越える」（cross categorical boundary）（『引』一五頁）ということを通して、物（自然・宇宙）という生きた身体を生きた比喩を通して感じ取らせるための言語的営みとなる。くりかえし言っているように、著者が明らかにしようとしているのは、「類物」（類を以って応じる）という関係性において世界を感知させ、構築させるという古典詩文の伝統的なパターンである。著者によれば、上古文学・思想に端を発するこのパターンは、その後も延々と中国文学に継承されてきた（『引』二五－二六頁）。著者は、詩における音声的近似性を含む物事の間の類似性が如何に「天文」と「人文」を、または「道の文」と「心の文」を類似的に／比喩的に提示しようとしたかを力説している（『引』四七頁）。身体と宇宙との関連・往来を言語化させる仕組みを明らかにしようと試みることこそが、陸機（二六一－三〇三）の『文賦』や、劉勰（四六五？－五二〇）の『文心彫龍』などによって代表される魏晋南北朝文学の理論が説こうとした核心である。これを明らかに解読しようとしたのが『引譬連類』の主旨であると、私は理解した。

著者によれば、「引譬連類」の世界において、つまり「宇宙―身体」が物質的な形態として存在するものはなく、ただあるのは充満し拡張する、互いに「融通無礙」の「気態」であるとしている

（『引』三五頁）。このような観点から著者は言（文）と物、文における気と身体との関係を探求しようと試みている。この意味において『引譬連類』は道家的に詩学を論じたものとも言える。かくして『引譬連類』のキーワードとしての「引譬連類」は、言語論的に詩学の中心観念を論じようとする意味において、高度に文学理論的用語ではある。しかし著者が「気」「身体」などの概念と文学との関係を考察しようとする意欲からすると、近代的な、翻訳語としての「文学」という概念・枠組みを遥かに超えており、それを批判的に相対化しようとする試みでもあることを窺うことができる。この点について本人も述べているように、「引譬連類」「聯類」「応類」についての討論は、高度に学際的なものとなっている（『引』二四頁）。ある意味では『引譬連類』は氏の古典的「人文」学――西洋の翻訳語がやってくる前の、漢字そのものの文字面通りの「学」――に対する研究と言っても過言ではなく、やや野心的な著作とも言えるのである。

2

鄭氏の研究の出発点は六朝文学である。ここで言う「六朝」とは、一般的に中国歴史上で、建康（建業、現在の南京）に都をおいた三国の呉、南朝の東晋・宋・斉・梁・陳の六つの時代（二二二－五八九年）を指すが、本書評においては、魏晋南北朝時代、すなわち後漢末期の一八四年に起きた黄巾の乱からはじまり、隋が五八九年に中国を再び統一するまでの時期を指している。六朝文学は駢儷体の文章や、詩、特に文学理論の高度に発達し成熟した時代である。この意味において、六朝文学研究とは、多くの場合、詩学的哲学的研究を意味している。この時代は思想的に見れば統一王朝の思想としての儒家の権威が失墜し、仏教、特に道家思想が高度に文学に浸透する時代でもある。このような時代の文学の研究から学者としてスタートした鄭氏は、のちに古代の『詩経』に遡り、また近現代の中国の詩学まで理論的に研究してきた。本書評で論じる『姿と言』は近現代の中国の詩学を系統的に研究した成果である。ここで六朝文学という鄭氏の中心的仕事を強調したのは、ほかならず六朝自体の理論的な蓄積の厚さこそが氏の先秦、秦漢への遡及的な研究と近代への下降的な研究において重要な意味を持っていることを強調したいためである。そして、同時に『引譬連類』における六朝を中心とする古典詩学の斬新な研究が『姿と言』における近代詩に対する系統的な研究と如何にして関わっているのかを強調するためでもある。紙幅の制限のため、ここで敢えて一点だけ強調するならば、『引譬連類』が外国の哲学、詩学、言語学理論を多様に駆使しているという方法論的特徴は、ある程度後の『姿と言』にも当てはまるという点である。このことからも窺えるように、鄭氏は両著書において古今東西の複数の二項対立をバランスよく乗り越え、中国の詩学の普遍的な構造を求めようとしているといえる。

前述した通り、『引譬連類』の最終章における黄遵憲の「詩界革命」論は前近

代から近代への転換期についての唯一の文学論であるが、この章は五年後に出版される『姿と言』の予告となっている。これは次の意味においてそう言える。

まず、『引譬連類』が古典詩学・古典文学思想論であるのに対して、『姿と言』は清末から民国までの詩学を理論的に論じる著書であるが、両著は黄遵憲の近代詩を理論的に論じる点において繋がっている。次に、『姿と言』は近代と近代詩との関係を言語論的な視点から論じようとするのが特徴であるが、同時に古典詩学的にも論じられている。この特徴は、ちなみに『姿と言』の文献リストを見ればわかる。『姿と言』の文献リストは「一 伝統文献」「二 近人論著」という順番で並べられており、「一」は漢代の『詩経注疏』『楚辞章句』などの古典文献から始まっている。これも両著の内的な関連が強いことを物語っている。また、『姿と言』が近代的な産物である博物館から論を始めたことも、対比を通して『引譬連類』との関連を裏返しに物語っているものである。なぜなら、博物館が「分類」「比較」であるのに対して、近代以前は「連類」「親附」となるからである（『姿』六九頁）。明治初年の博物館の分類に対して、日中共有の漢詩の「連類」との拮抗を扱った本書の最初の章は、作者の「近代」を相対化する意図を垣間見られるところでもある。

民国期の新詩（口語による不定形の中国語新体詩）は本来古典文言定型詩（日本でいう漢詩）を打倒しようとして出発したので、普通はそれを「古典詩学的に」論じることは容易ではなく、あまり先行研究が見られないようである。しかし、『姿と言』はこの点をバランスよく乗り越えることができたといえる。これも本書の方法論として言語論的手法に主に依拠していることと不可分である。『姿と言』が前著『引譬連類』と同様に、説得力を持っているのはとりわけ言語論的に論じていることにあるとさえ言うことができよう。『姿と言』はとくに白話文運動発足と前後する、馬建忠（一八四五－一九〇〇）や黎錦熙（一八九〇－一九七八）などの文法学に対する批判的な検討から始まっている。そこから白話文運動の展開とともに起こった、修辞学の登場をこの近代的な文法学に対する連動・発展、ないしはそれを反省としても見なしている。最後には『姿と言』において「意義学」によって示される、新詩の意味生産の構造に対する理論的な探求の系譜が整理されている（「意義学」という鄭氏の用語は semantics の訳であり、日本語の意味論の語に当たる）。強調すべきなのは、白話文運動への反省として（または反省を通しての運動の推進として）、詩的言語を言語論的に探求する系譜に関する研究は筆者の知っている限りではあまり見られていない。この点も『姿と言』の貢献である。

3

六朝は周知の通り、中国の文学批評史において一番豊かな成果を挙げた時代である。そのなかで音声、韻律などの形式の問題が重視され、頻繁に議論された。例えば、『引譬連類』において頻繁に言及されている西晋（二六五－三一六年）

の批評家、陸機の『文賦』は、初めて音声、韻律などが意味生成において果たした役割をより系統的に探求しようとした作品であり、「声色」という概念を提起した。のちに沈約（四四一―五一三）や、梁（五〇二―五五七年）の鍾嶸（四六八？―五一八）の『詩品』と、ほぼ同時代の劉勰の『文心彫龍』などにおいても、音声、韻律などの形式の問題が大いに議論された。また、『詩経』学の核心的な概念である「興」を、『毛詩』も『鄭箋』も（特に後者）修辞から道徳的倫理的解釈を引き出すような解釈的傾向が強かったが、鍾嶸も劉勰もそのような研究史・解釈史と距離を置きながら、興という概念を詩学一般の問題として解釈した。鄭氏が『姿と言』において文学的な近代を言語論的に批判的に考察する際にその核心的な問題の一つは、音律（音声的要素、リズムなど）を意味生成との関連において集中的に論じてきたということである。

かくして詩学一般の問題の視点から、近代的な白話文の問題を言語論的に批判的に検証しようとした『姿と言』は、古典詩学の問題を扱う『引譬連類』と強い関連性を持っているのであり、両著とも「方法論としての〈六朝〉」――本書評の用語ではあるが――という方法論的視点を共有していると、ここに指摘しておきたい。そうであるがゆえに、鄭氏の『引譬連類』から『姿と言』を書いた理由は、やや大げさに言うならば、「方法としての〈六朝〉」こそが『引譬連類』と『姿と言』という二著に共有されているものであり、そのため特に前者の方法を後者に応用したということが評者の考えであると強調したい。同時にこのことは、評者から見れば、『姿と言』における近代詩の問題を著者が古典詩学的に論じようとしていることを意味している。言い換えれば、著者は古今の二項対立を上手く乗り越えて論じているとも言える。

この関連性は、例えば『姿と言』の中の「姿」は、アメリカで教鞭を執っている比較文学者陳世驤（一九一二―一九七一）の画期的な論文「中国詩字之原始観念試論」（一九五九年）、陳氏が陸機の『文賦』を英訳した後に構築した「姿」という概念（論文「姿とGESTURE」）から直接示唆を受けたものである（『姿』第四章「姿態節奏」を参照[30]）。

近年、王徳威、鄭氏本人をはじめとする台湾出身の学者、そして香港の陳国球などの研究によって、「抒情伝統」という概念が提起され注目された。これらの研究者は、「抒情」に関する戦後の研究の系譜において特に陳世驤と、同じくアメリカで教鞭を執っている高友功の詩学研究に対して評価が高い。鄭氏は頻繁にこの「抒情」の研究の系譜に言及し、この研究の系譜に対してアイデンティティを強く感じていることは疑いはない。しかし一方で評者からすると、鄭氏が前述二著において提起した問題は前述の「抒情」の問題圏と重なってはいるが、同時に「抒情」の問題圏を遥かに乗り越えているものであると思われる。例えば、「気」の問題もそうであるが、両著において「イメージ」（現代中国語の「意象」という語）を使わずに「姿」を使ったのは、ほかならず『引譬連類』の問題

意識の一つである自然、身体と文との関係、または、「連類」を以て身体と宇宙と関連・交通させようとする仕組みを理論的に探究しようとする意識が強いからである。このことは、遥かに今日の翻訳語としての「文学」概念を乗り越えるものであり、すでに哲学的な問題である。

他方、『姿と言』における言語論的な方法論は徹底的に陳世驤からの濃厚な影響が窺い知れる。鄭氏は言語論的新詩の問題をジャンルの問題というよりも中国語の「内的形式」の問題であるとしながら（『姿』二七六頁）、排他的な白話文運動の批判者である小学家一派（古典漢字学の専門家）が文字のレベルにおいて展開した議論に大きく依拠している。『姿と言』の中の小学家一派の論者に、劉師培（一八八四－一九一九）、黄侃（一八八六－一九三五）、胡樸安（一八七八－一九四七）らがいる。このことは著者が若いころに強い感銘を受けた陳世驤の詩学研究における字源学などの小学的研究方法論と通じている点である。先に鄭氏の二著が「六朝詩学」を方法としていることを論じたが、本書評における「方法としての〈六朝〉」とは韻律、音声的要素などの要素と意味生成との間の関係という形式論的な問題を重視するという意味を含んでいる。それだけでなく、「連類」という思考・理論を強調する用語でもあり、同時に、近代白話の問題を考察する方法論的視点でもある。言語論的な方法はこの「方法としての〈六朝〉」に奉仕するものである。

中国近代文学とその批評における「抒情」の伝統は、近代批判の意味を含有していることは否めない。他方、「抒情」をめぐる討論はそもそも広い意味での「革命」（清末の黄遵憲の「詩界革命」、「五・四」新文化運動における胡適の「詩国革命」、共産主義などの社会革命など）及び進化論的歴史観、言語道具論、音声中心主義などの考えから派生した問題でもある。中国文学の批評の伝統の一つは「文」と「質」との均衡的な関係、または今日の用語でいうならば、美と倫理との均衡的な関係に対する強調である。この理解が正しければ、「方法としての〈六朝〉」が意味しているところのものは、評者には興味深く思えるのである。

注

〈1〉（漢）毛公伝、鄭玄箋、（唐）孔穎達正義『毛詩正義』（十三経註疏本 巻一－一）台北：藝文印書館、一九七九年、一五頁。

〈2〉（魏）何晏等注、（宋）邢昺疏『論語注疏』（十三経註疏本 巻十七）台北：藝文印書館、一九七九年、一五六頁。

〈3〉Stephen Owen, *Traditional Chinese Poetry and Poetics*, Madison: The University of Wisconsin Press, 1985, Chapter 1, pp. 12–27.（『引』三二頁）

〈4〉Stephen Owen, *Readings in Chinese Literary Thought*, the Council on East Asian Studies of Harvard University, 1992, p. 589.

〈5〉いずれも『陳世驤文存』瀋陽：遼寧教育出版社、一九九八年、所収。